

CODE KILL

written by HADEYA

1

銃声が轟いた。二発、三発。

発砲したのは細身の黒人女性——ナンシー・ニュースタイル。銃弾はグレッグ・フォアマンの頬を掠め、二発目が首に直撃した。

警備に当たっている警官が一斉にナンシーを狙って発砲する。ナンシーは遊具の影に隠れながら発砲を続けている。刑事——ジャック・モートンが倒れたグレッグの元に駆け寄った。グレッグの怪我は幸い掠り傷だった。

「立て、逃げるぞ！」

モートン刑事はグレッグを立たせると、ハンドガンを乱射しながら車まで走った。一発の銃弾がナンシーの右肩を貫通した。それでもナンシーは銃を離さない。

「銃を捨てろ！」

怒声を発しながら警官たちがナンシーに接近する。ナンシーは……銃を捨てなかった。銃口を自らの顎の下に宛がうと躊躇なくトリガーを引いた。

「乗れ！」グレッグとモートン刑事が車に飛び乗った。モートン刑事がエンジンを掛ける。またしても銃声が聞こえた。またしても、またしても。複数の殺し屋が同時にグレッグを狙っている——直感でモートン刑事は悟った。

「伏せろ！」

叫びながらモートン刑事は車を走らせた。アクセルを目一杯、踏み、センター公園を後にする。銃声はなお聞こえる。

車は車体を傾けながら猛スピードで一般道へ躍り出た。

2

グレッグが狙われるのには理由がある。

グレッグは検察側の証人だ。近日、大物マフィアに致命的な証言をする予定の。

マフィアはグレッグの首に一億円の懸賞金を掛けた。金が目当てで国中の暗殺者が集まった。そしてグレッグの日課である朝の散歩の時間に殺し屋たちは狙いを定めた訳だ。

*

「無事か！」

グレッグは無言で頷いた。モートン刑事の運転する車は滞在先のホテルを目指している。そこが最も厳重な警備だからだ。

「明日から散歩は中止だ」

モートン刑事は当然と言わんばかりに告げた。

「だけど——」

「だけど、も何もない！ 中止と言ったら中止だ！」

ふとモートン刑事は横を見た。一台のオートバイが接近し、隣に並ぶ。その手にはハンドガン。

「こ、殺し屋だ！」

「安心しろ、防弾ガラスだ！」

オートバイのライダーは銃口を下に向け、タイヤを撃ち抜いた。

「糞！」

ホイールが火の粉を上げながら回転する。モートン刑事は車体でオートバイに体当たりした。そのままガードレールでオートバイを押し潰し、車を加速させた。

オートバイが転倒したのを確認し、モートン刑事はハンドルを切った。

まだ油断は出来ない——他の殺し屋がグレッグを狙っているかも知れない。

モートン刑事は神経を尖らせていた。

3

ホテルの駐車場に着いた。ここまで来れば、安全だ。

「安全じゃねえ——」

言いながら三人組——クレイジースリーが歩いて接近して来た。三人共、上半身は裸。下は季節外れのショート・パンツにビーチサンダル。手には小型のチェーンソー。

「——ちっとも安全じゃねえ」

リーダーと思わしき男がボンネットに飛び乗り、フロントガラスに小便を引っ掛けた。

「車から出るな。車の中が一番、安全だ」

モートン刑事が言った。三人組の二人が車の下に潜る。ゴソゴソ物音がした。

「……マズい！ 車から出る！」

二人組はナイフで車の燃料タンクに穴を開けた。同時にモートン刑事とグレッグが車外へ踊り出た。待ってました、と言わんばかりにボンネットの男がマシンガンを撃ち、モートン刑事はハチの巣になった。

「さて——」

短パンのジッパーを上げながらリーダーがグレッグに接近した。チェーンソーを受け取り、二人組の一人が背後からグレッグを羽交い絞めにする。リーダーがチェーンソーを吹かした。

グレッグは恐怖の余り、過呼吸に陥っていた。

4

クレイジーフリーは黄色のワーゲンを運転している。グレッグの生首が入ったアロハ柄のバッグを抱え。「チョロかったな」

運転席のリーダーが言った。コロナビールを飲んでいる後部座席の二人が答えた。

「一億ゲット！」

「何を買う？」

「ドラッグと女を買って、ビッグマックを大量に買うかな」

「何個、買う？」

「数え切れない程の——」

トラックに横から追突された。

髭面の男——ロシア人が横転したワーゲンに接近する。ロシア人はバッグを強奪すると何事もなかったかのよう
にボンネットのひしゃげたトラックに乗り、その場を去った。

5

ロシア人は葉巻を啜え、トラックを運転している。目の前の道路に黒いコート姿の男が佇み、道を塞いでいる。

殺し屋に違いない——轢き殺してやる。

トラックが加速する。黒いコートの男がハンドガンを抜いた……と言うより右腕が巨大なガトリング・ガンだった。黒
いコートの男は右腕を改造した〈人造人間〉だったのだ。

けたたましい銃声が幾重にも重なり、ロシア人が車内で血を撒き散らす。

こうしてグレッグの生首はまたしても別の殺し屋のモノになろうとしていた。

6

その時、一発の銃弾が直撃し、トラックに接近する人造人間の頭部が吹き飛んだ。立て続けにトラックが爆発す
る。次々と周囲の車が爆発した。

撃ったのは一体、誰だ……？

7

「俺が撃ったのさ」

超巨大なライフルを構えながらジェイソンの仮面を装着した男——通称、ジェイソンが呟いた。
ジェイソンは巨大ライフルを操る最強の殺し屋。背後に片目の男が立ち、二丁拳銃でジェイソンの脳天を撃ち抜いた。
片目の男は言った。
「勘違いするな、最強は俺だ」
ドアが蹴破られ、複数の火炎放射器が同時に数メートルの火柱を噴いた。
「最強は俺たちだ！」

……一体、どう言う事か。グレッグの首には懸賞金が掛かっている。懸賞金目当てで国中の殺し屋が集まった。しかし、いつしかゲームの構図が変わり、金目当てのゲームから〈最強の殺し屋〉を決める抗争に変貌を遂げたのだ。

果たして最強は誰か？ 結論から言えば、この殺し屋が最強だ——

8

——新堂ウルハは目の前のソファに着席した奥田康平に問うた。
「それで？」
「ターゲットは二人」
奥田はハンドバッグから二枚の写真を出し、目の前のテーブルに置いた。その目が細まり、危険な光を帯びる。
「組の金に手を出した馬鹿共だ。奪われた金は二億」
相槌を打ちながらウルハはガムをクチャクチャ噛んだ。
「おい、組ちよ……親父の前だぞ」
見るに見兼ねた舎弟が怪訝な表情で言った。奥田が手で制する。ウルハはガムを噛みながら写真を見た。二枚の写真には二人の男が映っている。
「こいつらを殺れと？」
「そうだ。ブツ殺して金を俺の所へ持って来い」
「で？ こいつらはどこに？」
「興信所が探してる。見つかるのは時間の問題だ」
ウルハは写真を畳み、皮ジャンのポケットに突っ込んだ。
「武器と携帯電話、車が必要です」
「すぐ届ける」
ウルハは立ち上がり、挨拶もせず、背を向けた。慇懃無礼な態度にも関わらず奥田は怒っていない。ウルハが退室したのを見計らって舎弟は尋ねた。
「あれが新堂ウルハ……さん？」
「いい女だろう」
「そんなに凄い方なんですか？」

奥田は煙草をくわえ、上目使いで舎弟を見た。

「龍神って、知ってるか？」

「いえ」

「中国人マフィアだ。二年前、ウルハは幹部を殺った。どう殺ったと思う？」

羽守は首を傾げた。

「さあ……」

奥田は言った。淡々と。

「素手で殴り殺したんだよ」

9

ウルハは山手線に乗り、潜伏先である高田馬場へ向かっていた。例によってガムをクチャクチャ噛みながら。ドアの傍に立ち、輝きのない瞳で窓の外に広がる日本の景色を眺めている。この国で殺した人間は九人。日本人が六人、中国人が三人。みんな命乞いをした。額に汗を浮かべ、目尻に涙を浮かべ。容赦なく殺した。いつしかウルハは呼ばれるようになった。死神。

味のしなくなったガムを口から出し、窓にベチョリと貼り付けた。それを見た初老の男性が棘のある口調で言った。

「ちゃんとゴミ箱に捨てなさい」

「やかましい」

男性の顔に驚きと嫌悪が浮かぶ。ウルハは視線を逸らした。胸中穏やかでなかったのだ。男の顔が父に似ていたからだ。思い出したくもない記憶が蘇る。父——暴力団の殺し屋。自分の娘を犯す人間の屑。高田馬場に着くまでの間、ウルハは忌々しい記憶を消そうと足掻いていた。だが足掻けば足掻くほど記憶が心を蝕む。特に嫌な記憶が蘇った。忘れもしない一月の夜。その晩、父は殺人現場に幼いウルハを連れて行った。そしてアーミーナイフを出すと英才教育と称して目の前で死体を切り刻んだ。父は言った —— お前もやってみろ。怖くて怖くて仕方なかった。が、やらざるを得ない。ウルハは死体を刻んでナイフの扱いを学んだ。

他にも嫌な思い出はたくさんある。だが数ある嫌な記憶の中でも、これが最も嫌な記憶だった。

ウルハは山手線の車内で嫌な記憶を一つ残らず思い出していた。自分でも驚くほどウルハの人生は血と暴力に塗れていた。

10

高速道路で成田空港を目指す。組織の金を持ち逃げした二人は国内には潜伏できない。確実に国外へ向かう。となれば行先は一つしかない。インターポールの手配を逃れる国と言え一つ——

煙草に火を点けた。クチャクチャ、ガムを噛みながら。

スマートフォンと車は組織からの根回しで入手した。ハンドガンも。武器は……至る所に存在する。ウルハは目の前に無造作に転がるボールペンを見た。

ターゲットが国外へ逃亡する前に、これで刺す。空港内で。心臓を一突き、首の頸動脈をエグる。

「やかましい」

ごちた。口癖だった。集中力が増すと、何故か、その言葉が口から吐いて出る。自分でも何故、その言葉が出て来るのか理解できなかった。

夜。レクサスを空港傍のパーキングに止め、武器であるボールペンを握った。

ボールペンをポケットへ入れた時、目の前をフルスモークの白いワゴンが横切った。ワゴンは猛スピードでやって来て出口を完全に塞いだ。ウルハは悟った——中国人。

「糞！」

叫んだ。ワゴンから大勢の中国人が下車した。

ウルハの身柄は中国人のものとなった。

……連れて来られたのは、がらんどうの雑居ビル。建設途中のビルで予算オーバーの為、建設が中止されたとの事だった。

中国人の数は十三人。全員、殺気立っている。

ボスらしき人物がゆっくりとウルハに近付いた。

「殺す」

言われなくても分かっている。問題は どうやって殺されるか、だ。

願わくば、銃で一発。だが、そうはならないだろう。中国人の手口は知っている。

ボスが合図した。手下がウルハの顔を抑え付ける。ボスは液体の入った茶色の瓶を取り出した。

「硫酸だ。これで、お前を溶かしてやる」

*

「これで、お前を溶かしてやる」

言いながら父は硫酸を幼い私の手に浴びせた。

「痛い！」

手の甲から焦げ臭い白煙が上がる。父は告げた。冷酷な口調で。

「やかましい。逃げようとした罰だ」

咄嗟に私は……付近に置かれたハンドガンを取り、銃口を父に向けた。マズルフラッシュが光った。

11

「次はお前の番だ」

中国人がトカレフをウルハに向けた。ウルハは笑った。

「……何が可笑的い？」

「その後、どうなったと思う？」

「何の話だ」

「親父よ。糞親父」

ウルハは続けた。

「ナイフで全身を滅多刺しにしてやった。それでも気が済まなくて家族を皆殺しにしてやった。それでも気が済まなくて殺し屋になった」

「昔話か？」

「私が殺した人数は九人。日本人が六人、中国人が三人。何で私が死神って、呼ばれるか分かる？」

「うるせえ！」

手下の中国人がウルハの腹を蹴ろうとした。その足をウルハが掴む。ウルハは宣戦布告した。

「最強だからだよ」

右足をヘシ折った。トカレフを強奪して連射した。正確無比な射撃で五人の手下を一気に射殺した。

*

殺し屋になって最初のターゲットは対抗組織——稲木組の若頭だった。本人の目の前で妻の眼窩を撃ち抜いてやった。

名が知れたウルハは地球上で最も残虐なタイ・マフィアに雇われる事となった。

タイでも人を殺した。ロシアでも人を殺した。北朝鮮でも香港でも人を殺した。外国で殺しを重ねた。殺して殺して、殺しまくった。

殺せば殺すほどモンスターが成長する。殺すとスカッとした。殺さないとスカッとしなくなった。

殺したい。殺そう。殺す。殺人に殺人を重ね、殺しまくって生きて来た。

殺す。今夜は中国人を殺す……御免なさい、今まで嘘を吐いてたの。私がこれまでに殺した人数は九十九人。人は私をこう呼ぶ——

——死神のウルハ。

12

室内の中国人を皆殺しにした。そのままビル内部を進む。出くわした者は片っ端から射殺した。

殺す。殺す。殺す。どいつもこいつも殺してやる。

「次に殺されたいのは誰？」

ビルの中、ウルハはマシンガンを手にもつて中国人マフィアを片っ端から殺して行った。殺しても殺しても殺し足りない。だって殺したいんだもの。殺した分だけ、殺したくなっちゃうんだもの。何でもありよ。射殺、絞殺、撲殺。殺殺殺。

「殺してやる、手前等！」

叫びながらウルハはマシンガンを乱射した。

殺しまくった。覚悟しな、殺してやる。殺すって意味、お分かり？ 命を奪うって意味よ。

殺したい！ 殺させて！ ああ 殺したい！

どこで殺せば良いのかしら？ 誰を殺せば、良いのかしら？

殺すっつてんだらう、クソッタレ！ ブッ殺してやる！

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872